山の麓、川の畔

At the foot of the hill along the river

件の立地は「三辻」という街道の交点で、 古代から人馬行きかう邑 (村) の要所であり、
「山の麓、 川の畔」の原風景の立地である。
　家を建てるにあたり居住性、 機能性は大切だが、 最も重要視したのは「床座住居へのオマージュ」。
弥生時代中後期 (紀元前後) の高床式住居の切妻屋根の棟は外に向かって跳ね出しており、 その
傾斜を我が家の 1 階壁の傾斜角に当てはめることだった。
　棟の跳ね出しが居住性や機能性を飛び越して何を表現しているのか。 美観の原点ではないのかと、
家の壁は傾いた。 困難きわまる工程に「スリーエス (施主、 設計者、 施工者)」の心も何度も
傾いていた事は言うまでもない。　　（施主コメント）

プロジェクトは土地探しから始まり、 計画地の開発申請、
設計監理が終了するのに 5 年の歳月を要した。
当初予算に合わせた提案を行ったが、 望まれたのは今後の
人生を送るのにふさわしい空間性であり、 居住性を損なう
ことすら躊躇しない、 自分にとって大切なことを確信して
いる姿勢にある種の感慨を憶え、 志操の歳月が始まる。
　その後振り切った方向性のデザインに夫妻からご賛同を
頂き、 予算の増額、 コスト調整を繰り返した。
また地元の業者を使うたっての希望もあり、 元請である
東京の大原工務所大原社長にご尽力いただき、 何度も地場
の方々と話し合い、 工事に参加して頂けることとなり、 ようやく着工となる。
　着工後も強風、 山火事、 コロナに加え、 難易度の高い施工に工期は遅れに遅れたが、 しっかりとしたものを
つくってほしいとご夫妻からは現場へ毎日差入れが届けられた。 現場の奮起が幾度となく訪れた危機から救って
くれた。 何か自分たちの存在を超えた大きなものに見守られてゴールに向かって進んでいるような気がした。
　変形 5 角形の多面体のフレームに高断熱高気密化した性能とディテールのつめられた特注の開口部建具や家具、
オリジナルの設備システムをまとった建築が、 植栽されたグラス類によって草原にぽっかりと浮かぶ、
小さなコンクリート船のように見える日が訪れることを願っている。（設計コメント フジイデザインステュディオ 藤井兼祐）